
夢の中の話

紙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の中の話

【コード】

N9080F

【作者名】

紙

【あらすじ】

記憶をなくした主人公が当てもなくフラフラしながら、過去の記憶らしきものに遭遇する。

(前書き)

年始に神社の近くでアルバイトをしてました。ちょうど最終日の朝、この夢を見ました。雰囲気が好みだったので文章にして残しておきたいと思いつながら、その日の夕方、その神社にお参りに行きました。そしたらなぜかお坊さんがいて、かなりびっくりました。後で聞いた話だと、実はお寺だったようです。

ここはどこだろう？

私の目はすこぶる良くもないが悪くもないはずだ。しかし世界全体に霧や霞がかかっているかのように、どのものの反射した光も認識できなかった。ただ、とても気持ちが良い。身体はほくほく温くて、私の意識は完全に夢の中にあるらしかった。

「お客かな？」

後ろから青年の不思議そうな声がした。お客、ということとは店があるはずだが、私にそんなものは見えない。私は慌てて声の主に振り返った。彼は若い僧であった。

「こここの稲荷は美味しゅうございましょう。私も時々買いに来ます」
そう言われて彼の視線の方を向き直れば、確かにそこには茶屋があった。

はて？ こんなものはなかった。いつの間に現れたのだろうか？
やはり私は夢の中らしい。その証拠に、茶屋の二階より上は霧にかかってよく見えない。

僧は先に店に入ると私を招き入れた。思ったより広かった。なぜかわからないけど、私は小さな小さな、こじんまりした茶屋を期待していたのだ。中には四人ほどで囲めるテーブルの、私の右側、奥の方へ五、六台が一行に並んでいる。左手にはカウンターがあつて、悲しいかな、そこでも夢の力が発揮されてメニューの一つも見ることもできない。

カウンターから一人の老婆が現れた。白髪を結っている。顔はわからない。

僧は何やら（稲荷を買っているだけだと思つが）婆さんと話していたが、やがて二人は私の方を向いた。

「君は、行くところがおありなのかね？」

「ありません。私には記憶がないのです」

特別僧はおかしな顔をしなかった。ただ私は、そのようなことを聞かれるほど、自分はひどい風貌をしているのだと知った。

「この姫の知り合いを訪ねなさい。住み込みの用がありますよ」

二、

私は彼の言葉に頷いたに違いない。なぜなら、私自身が働く姿が脳裏にうかぶからだ。しかし世話になったはずの、婆さんの知り合いの顔も忘れてしまった。また私は何も無い世界へ戻ってしまったようだ。

三、

私は坂道を上っていた。眼下に町並、砂浜、海が見える。夢の中だというのに日差しが眩しかった。更に上を目指すため、町とは反対の、崖の方へと歩みを進めた。

その時だ。私は海へ引きずり込まれてしまった。

あつぶあつぶしていると、定期的に視界が波に遮られる。私は子どもに戻っていた。地に足がつかぬ。それでも私は沖を目指した。いや、私だけではなかった。私の周りに、似た年の子ども達が、着物を着たまま、同じように沖合いを目指していた。度々大きな波に目標を失いながら、私たちの思いは同じだった。

お母さん

すうーっと、身体が浮き上がった。突然海から飛び上がったシマウマの背に、私達は乗っていた。シマウマは波を蹴り、海を走って、

坂の下の岩に当たって泡になった。その衝撃で岩の上に投げ出されたのは私だけのようだ。私は大人に戻っていた。

四、

岩から元の坂道へ上がるのには息が上がった。夢の中なのに変だ。私は坂道に寝転がって、休憩することにした。

今のシマウマは何だったのだろうか？ 母を追い求めたあの姿は本物だろうか。記憶が戻りつつあるのだろうか。そうあってほしい。この下にある町や浜辺も、知っている風景なのだろうか。夢の中では期待だけが膨らんでいく。

はて？

私の頭の上の地面。差していた木の枝の影が、妙に暗いのに気が付いた。上半身を捻って、這いつくばる形で道の先を見てみれば、そこに小さな小屋が一軒建っていた。その小屋から、何か得体の知れない黒い靄が漂っている。私はそれに釘付けになった。

小屋の入り口には、一人の白い服をまとった男が立っていた。彼はおもしろいようなものを見るかのような、道化のような目付きで私を見ていた。私は彼に導かれるように、小屋に足を踏み入れた。

中は暗かった。私が入るときに、外の光が半分ほどの面積を照らした。しかし残りの半分には人がいた。初めにあった僧侶だ。彼は黒い袈裟を纏い、熱心に小屋の中心に両手を合わせていた。

墓だ。誰の？

「君もお参りしてください」

若い僧は静かに言った。断る理由もない。私は僧が下がるのと入れ替わりに、墓の前へ出た。入り口にいた白衣の男が中へ入り、戸を閉める。

一体誰の墓なのだろう？

手を合わせた瞬間、私の胸は痛んだ。

後ろに立っている僧が、ひどく私に憎悪を向けている気がした。夢だからこそ、その表情が、感情が、見えたのである。

私に向かって手を差し出している。確かに何か、私の後頭部に当たっている。

私は悟った。ここに眠っているのはこの僧侶である。いや、僧侶ではない。僧の姿をして、冥途からこの世に出てきた怨霊だ。私はきつと記憶のない過去に、この男を死に追いやったに違いない。

しかし私は二度も彼に会ってもなお、彼を思い出すことはなかった。ああ、私はひどい人間だ。殺してくれてかまわない。私がどんな理由で殺したのかはわからぬ。しかしきつと、君が恨む理由は十分にあるだろう。

ひよっとすると、無くした記憶の最後は彼の死だったのかもしれない。私は彼に振り返った。

五、

私の後ろに彼はいなかった。まるで泡になって消えたシマウマのように消えていた。彼がいたところだけ、ぼかんと穴が開いたかのようにだ。入り口の男の白衣が、暗がりで見え出た。

成仏したのか……

憎悪が消えたということは、そういうことだろうと思った。

虚しさだけが残った。私は彼を思い出せない。思い出さないほうが良いのだろうか

ほわっと、視界の端に光を感じた。白衣の男が黄金に光っていた。彼もまた、常人ではなかったのだ。私には神に見えた。

彼は戸を開け、光を纏いながら言った。

「あなたには次のステージが待っていますよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9080f/>

夢の中の話

2011年9月6日18時21分発行